

国内研修報告書

「福島県白河市 ローカルヒーローと地域活性化」

I 概要

2016年2月10日～11日の二日間、私は福島県白河市に行ってきた。主な目的は白河市公認のローカルヒーロー「ダルライザー」に会い活動に関するお話を聞くこと、実際に白河の人たちはその存在をどう思っているのか、の2点を確かめに行くことである。また、白河だるま市でこの街の歴史と文化にも触れたいと考えた。

一日目は活動が始まった経緯や考えについてのお話を、ダルライザーを運営する「ダルライザープランニング」代表の和知健明さんから伺った。二日目は白河だるま市に行き、地域を代表する伝統のお祭りを体感しながら、出勤しているダルライザーやその周囲の人にインタビューを行った。また二日間を通じて、遠くの地域から会いに来たファンの方や地元の方、白河市役所の観光課の皆さんにもインタビューを行うことができた。

II 福島県白河市

東京から東北新幹線で1時間30分、福島県の南部に位置するのが白河市である。平成17年に白河市・表郷村・大信村・東村が合併し、現在は人口約6万2千人(2015年12月1日)で規模としては県内でちょうど中位である。また高齢化率は22.7%(2010年)となっており県の25%を下回る。(※) 2月の最低気温はマイナス3℃で、私が研修を行った間は晴れていたにもかかわらず、やはり寒いと感じた。しかし東北地方の中では雪が少ない地域であり、多摩キャンパスのほうが積もっていたな、と思うくらいであった。新白河駅は新幹線停車駅ということもあって駅前にはビジネスホテルが立ち並び、車両通行量も多かった。一方で人通りは少なく、観光地というよりは住宅街としての印象が強かった。観光地、かつ中心地としての機能を果たしているのは在来線で一駅先の白河駅周辺である。こちらはがらりと印象が変わり、駅から徒歩3分の小峰城や白河市立図書館などがあり人通りも多く、観光客もいた。だるま市の会場となる中町通りは飲食店や雑貨のお店が並び、蔵を改装した商業施設「楽蔵(らくら)」、駅ナカに作られた観光情報の拠点ともなっている「えきかふえ SHIRAKAWA」など積極的に地域活性化に取り組んでいる姿を見ることができた。

市が提示する将来像として「みんなの力で未来をひらく 歴史・文化のいきづくまち 白河」と定めている。(白河市勢要覧 p,20)そのスローガン通り、小峰城を中心とした城下町の雰囲気を残した街並みは歴史を感じさせるものだった。

III ダルライザー

この白河市で7年前から活動するのが「ダルライザー」である。名産品の「だるま」をモチーフに、英語で「起き上がる」を意味する rise(ライズ)を掛け合わせたことが名前の由来だ。元々は市の合併や市立図書館建設という大きな「イベント」が起きるのに合わせて

白河商工会議所青年部のメンバーが市のキャラクターとして企画したもので、活動の中心となった和知さんがデザインし制作したローカルヒーローである。だるまの雰囲気を残しつつ、メジャーなヒーローたちが持つ特徴を取り入れることで純粋にカッコいいヒーローとして多くの人に受け入れてもらえるように工夫したと、和知さんは話していた。また、ダルライザーの大きな特徴として特殊能力を持った人間や、特殊スーツで戦うという設定ではなく、「普通の」人間がヒーローの「衣装を」着て戦う、と明言されていることがあげられる。さらに敵に当たるのが「天才集団ダイス」という6人組で、こちらも全員人間であるとはっきり言われており、黒スーツに加入順に割り当てられた各自の番号がサイコロの目で表された仮面を被った一目で人間とわかる姿をしている。それぞれが何かしらの「天才」であり様々な兵器やロボットを使って「白河の夜を黒く染め」自分たちの理想郷を作るために活動している。ダルライザーは自らの肉体を鍛えることで強くなり、何度敗れてもだるまのように立ちあがり戦う姿を見せることで、ダイスのいう強制的な変革ではなく、努力と工夫の大切さや諦めずに立ち向かうことをたくさんの方の心に訴えることでまちを変えていこうとする。このような設定にしたのは「現実味」のあるヒーロー像を作り上げることで身近さや親近感を持ってもらうためと和知さんは話していたが、同時にヒーローに対する固定観念を壊す意外性や独自性を持たせている点は興味深いと思う。

ただの人間と見せつつ、アクションはストップモーションや複数人での乱戦などの演出を取り入れ飽きさせないような工夫がなされている。各キャラクターの声優には東京などで実際に俳優として活動しているプロが起用されている。これは和知さんが俳優を目指して上京し大学に通っていたころに出来た仲間に声をかけたからである。また、和知さん自身も演技や演出の勉強をした経験からアクター(着ぐるみに入っている人のことを指す。ダルライザーショーでは事前に録音された音声に合わせて舞台上の人間が動きを合わせる方式をとっている)に演技指導を行うなどクオリティの向上に徹底して取り組んでいるお話を聞いた。これはショーという商品の価値を上げる工夫であり、努力する姿を見せることでテレビで見るとなようなヒーローでなくてもカッコよくなれる、というメッセージを含んでいるのだと思う。

同時に「一番のうりはストーリー」ともおっしゃっていた。前述の通り、キャラクターはすべて人間である以上、そこに至るまでの人生があり背景がある。ダルライザーの公式ホームページにはダイスが結成されるまでの経緯や、ヒーロー誕生のストーリーが掲載されている。こうした工夫によってキャラクターへの感情移入が容易になるのだ。そしてストーリーが難しい。ヒーローショーというのは普通は子供向けにするものだが、ダルライザーショーは、「対象年齢は高校生以上」という。実際に見てもらうのが一番だが、多数のキャラクターが様々な思いを抱えて戦い、ときには敵味方を超えて協力するなど、簡単に「誰が悪者か」とは言い切れない。それは大人を巻き込む工夫である。お子様向けの勧善懲悪ではなく、大人だからこそ考えさせられる言葉があり、子供だけではなく連れてきてくれる親に面白いと思わせることでまた次につなげてもらいたいという狙いがある。

また現在ダルライザーは「ダルライザープランニング」として和知さんが個人事業主となり運営されている。前例がない訳ではないが、まだ全国的には珍しい「起業する」選択をしたお話も伺うことができた。最大の理由は「若者に夢を与えるため」だった。白河でヒーロー業という夢のような仕事で食べていける道を示すことで、新しい生き方・可能性を提示できるという狙いがある。そこには田舎だからこそ、特に若い人たちに人生の選択肢を狭めないでほしいという願いも込められている。

これらのような他には見られない工夫や取り組みをたくさん取り入れているのがダルライザーの特徴なのである。

IV 白河だるま市

2月11日の建国記念日には毎年白河だるま市が開かれる。白河駅近くの中町、天神町、本町を中心とした1.5kmの道に700近い露店が並ぶ伝統のお祭りで、もちろん目玉は名産品の白河だるまの直売である。もとは市神祭というお祭りだったものが、木に紅白の飾りを付けて花の木に似せた「削り花」が売られるようになり「花市」とも呼ばれるようになった後、売り物の中心がだるまに代わっていき、昭和初期には「だるま市」で定着したといわれている。白河だるまは白河城主松平定信の時代に絵師に描かせて広まったものがルーツで、眉は鶴、ひげは亀、顔全体に松竹梅が模様化されたものが描かれ、「品の良さは日本一」ともいわれる顔立ちが特徴である。だるまと聞いてイメージしたものよりずっと優しい顔立ちだったので驚いた。また、小さいだるまからだんだん大きいものへと毎年買い替えていくと福が広がり縁起がいいとされ、古いだるまは「どんど焼き」で供養するのが礼儀であるそうだ。そんなお話を屋台でだるまを販売している方から聞いていたら欲しくなってしまう、気に入った顔のだるまを買うとかなり値引いて下さった。実はだるまは定価で買うのではなく、お店の人と交渉して値切るのが粋なのだという。東京から来た学生さん、ということでかなりのおまけをいただいたようである。こうした街の人との触れ合いは実際に行かないとわからないものだと感じた。

また午前と午後一度ずつある鹿島神社太々神楽も見学した。笛や太鼓の音に合わせ、踊りを奉納するものでとても賑やかなお祭りのなかでその時は厳かな雰囲気漂っていたのが印象的だった。最後にもちまきが行われてかなり盛り上がる。

毎年15万人は来ると言うだけあって、かなり混雑しており歩くのも大変だったが本当に賑やかで活気のあるお祭りだった。来場されている方にインタビュー調査を行ったが、回答していただいた12人中10人は地元出身で幼い頃から毎年だるま市に来ているという。また、グリーティング(写真撮影や握手などに応じること)で出勤しているダルライザーを目的地に県外から訪れたという人もおり、理由を聞くと「スノウスーツは今しか見れない」からという。この日も足先の感覚が無くなるほどには寒く、そんな白河での防寒用の装備として生まれたのが「ダルライザーズスノウ」という期間限定フォームである。この限定なのがファンの心をくすぐるらしい。さらには地元だったが、ダルライザーをきっかけに子

供も連れていくようになったというお母さんのお話も聞き、ローカルヒーローだからこそ地域に目を向けてもらうことができるのだなと感じた。

V 考察

大きく分けて3つの可能性と2つの課題を感じた。

・「正の連鎖」

前述の通り、あえて難しいストーリーにしたのは戦略的に親を取り込むだけでなく、ダルライザー(和知さん)の考えるまちづくりへの思いが託されているからだ。活動を始める前、夢がない若者に会ったことで、彼らの子供はどう育つのか心配になったという。そこから夢を持つ大切さを伝えたいと思い、ショーの中でもたびたび取り上げられるテーマとなっている。まず、親が夢を持ち、大人が頑張る姿を見せることで、子供にいい影響を与えたい、魅力的な大人の姿を見て育った子供たちが大きくなって魅力的な大人になり、まちを変えていってほしい、そんなつながりを和知さんは「正の連鎖」と表現していた。

最初はよく分からなかった。私はローカルヒーローが好きだが、両親や妹はそうではない。そんな連鎖は本当に起きるのだろうか、と。しかしだるま市で気付いたことがある。写真撮影に気さくに応じるダルライザーは人の多い会場でも、とても目立つ。そんな中で子供が興味を持って見ると親もまた気になって見るのだ。しかしかなりの確率で子供は近づくことを怖がる。すると親が先に近寄って声をかける。そしてその後を追って子供はヒーローに近づいていくのだ。親は子供が見るモノを見る、子供は親が見るモノを見る、そんな言葉が思わず浮かぶ光景がいくつも見られた。「正の連鎖」とは少し違うかもしれないが、これもまた連鎖なのではないだろうか。

・日常と非日常の境界線

これはファンにとっても、地域の人にとってもいえる。ファンにとってはこうしたイベントに行くことで普段の生活では顔を合わせないような「趣味の友人」を作ることができる。最近では **Twitter** で知り合った人同士がイベントで顔を合わせる、というケースが多いようで、インタビューさせていただいたファンの方の中にも、**Twitter** でダルライザーを知り、ファン同士でメッセージを交換し合うようになったという話を3人から聞いた。また遠方のヒーローに会いに行くことはめったに会えない人に会うという特別な体験をしていることになる。つまりこれらの特別な体験は「非日常」の感動を呼び起こすものなのだ。ショーの動画は今 **YouTube** などでネット配信され現地に行かずともみられるようになっていいる。それでもわざわざ会いに行くのは、そこに「人」がいるからだ。

また地域の人にとっては前述の通り目立つので印象に残るといえる。一緒に写真撮れば家族の思い出になる。また、インタビューの中で聞いたお話で、保育園に行きたがらなかった子供がダルライザーが来ると聞いて自発的に行き、それ以来通えるようになったということがあったそうだ。ローカルヒーローという身近な非日常の存在だからこそ、人の心を動かすのだと思う。

・地元の誇り、自信を取り戻す

インタビューを行う中で、ダルライザーの活動についてどう思いますか、と街の人に尋ねると必ず「良いことだ」という答えが返ってきた。それと同時にダルライザーを目当てに外部から人が来ることを知り「人気なんだ」と意外そうにつぶやく方も多かった。そのほとんどが嬉しそうな反応だったのはとても強く印象に残っている。

実は白河市には食べ物の名産が少ない。白河ラーメンは有名だが、過去に名店があり、そこで修行した人たちが散らばって店を構えたため店舗数が増え有名になった、という経緯でできたご当地グルメなのだ。私も食べてみて、とてもおいしかったが、一方でラーメンは各店舗によって味が変わりやすいので「B級グルメ」のような扱いにするのは難しいのではないかと思った。また、だるま市は有名だが「じゃあ行こうか」となるかといえそうとは言えないと思う。特に若い世代にはウケが良いイベントとは言いにくい。小峰城や南湖公園など観光スポットも多い。だが、誰もが知っている有名どころではないだろう。

そして新幹線で1時間30分という距離感は「遠くもないけど近くもない」感覚がした。はっきり言って今回研修先として選ばなければ足を運ぶことはなかったのではないかと、と思う。実際に行ってみればだるま市の熱気や歴史を感じる街並み、小峰城から見た景色など「良いところ」はたくさんあるのに、興味を持つきっかけがなかった。

私はローカルヒーローをきっかけに白河市に行きその魅力に気付いたが、他のファンの方も同じなのではないかと思う。県外から来ているのにだるま市の常連となっている方もいた。入り口は多い方がいい。

それだけではなく、白河商工会議所青年部の方のお話にあった「何もない街じゃない、ダルライザーがいるって言える」という言葉が一番重要であると思う。このまちで誇れるものがあることは、地元の人にとって自信を取り戻すきっかけになる。地元の人が地元を誇れることはさらなる地域活性化につながる原動力になるだろう。

課題としては、活動の継続性について挙げられる。前述の通り、ヒーロー業を成り立たせるビジョンを作りあげることが夢があると思う。しかし現状ローカルヒーローといえば、ボランティアでやってくれるもの、というイメージは根強い。団体ごとに方針があるので一概には言えないが、「見合った対価」は支払われるべきだ。そうしないと経営が行き詰ってしまう。このイメージとの戦いだけでなく、人手も課題となる。純粋に人数の問題ではない。ダルライザーに興味を持ったきっかけとしてファンの方から聞かれたのは「人柄に惹かれたから」というものだった。また、観光課の方にお話を聞いた時も和知さんを「力強い人」とおっしゃっていた。映画製作やすぐろくガイドなど様々な企画を打ち出すエネルギーギッシュさは、和知さん自身の力によるところが大きい。キャラクターコンテンツの面白さではなく「人柄」というのはその人しか持ちえない魅力だ。果たしてそのような魅力を後に続く人が十分に発揮できるかは課題の一つになるだろう。

VIおわりに

今回の研修で感じたのは、ダルライザーの活動を地域の人はとても好意的に受け入れているということだった。観光客を呼び込んだり、グッズを売ったり「経済」を刺激するのではなく、努力と工夫でたくさんの人を巻き込み惹きつけていく姿こそが地域の「人の心」を動かし、地元への誇りを取り戻していくことになる。白河でもやれることがある、と思わせることはローカルヒーローだからできることだと思う。「地域活性化を諦めさせない最後の砦」として人の心に強く働きかける力を持っていることがよく分かった。

最後に、今回たくさんの方にご協力いただいてとても貴重な体験ができたと感じている。白河の皆さんはよそから来た学生の唐突なインタビューにも丁寧に答えてくださり、温かく受け入れてくださった。人の優しさに触れ、また来たいと心から思うまちだった。また、ファンの方々もたくさんのお話をしてくださりととても参考になった。自分とは違う立場からの意見はとても貴重で刺激になった。そして誰よりも、今回の研修を受け入れてくださり、様々な興味深いお話をしてくださったダルライザープランニングの和知健明さんには心から感謝申し上げます。

至らない点もたくさんあったと思いますが国内研修で白河市に行って良かったと思います。お世話になりました皆様、本当にありがとうございました。

※参考

「人口減少社会における健康づくり施策の方向性～白河市の事例から～」

<http://www.f-jichiken.or.jp/column/169/kannoaki169.html>